

中世人と中古語

—文語研究への一課題—

根 来 司

〔要旨〕 本稿の目的は文語の系譜の上における中世の文語を論究することにある。この目的に対して、私は、同一時代にしかも同一社会に成立した、中世の文学作品徒然草と中世のてにをは祕伝書とを比較対照し、さらにいへば、主として徒然草においてははれた中古の格を誤つたてにをはを、てにをはは祕伝書の所説を手がかりとして究明し、——その場合どこまでてにをはは祕伝書が使ひ得るかが問題であるが、——そこに浮び上がったものが中世の文語であり、中世を特徴づける文語の中の文語であると結論するのである。

序

わが国の口語（口頭語）と文語（文章語）とは、中世初頭以降両者の間に著しい隔りがみえるやうになつて来るのであるが、中世の歌人、物語随筆作者が筆を染める場合には、自分の時代の口語を使ふことを屑しとせず、ひたすら古へを仰望し平安中期の言語に基礎を置くいはゆる文語を用ゐたことは周知のごとくである。しかし、徒然草は王朝の歌文に習熟した兼好がよく枕草子や

源氏物語を做つてものした、いはゆる擬古文であつても、所詮、それは中世人兼好の作品であるゆゑ、言語の変遷の影響は免れ得ず、いろいろ王朝のものを模し得ない点もあつたのである。

一方、中世のてにをはは祕伝書——手爾葉大概抄（鎌倉末期に成立すへられ）・姉小路式（吉野時代に成立する）・姉（鎌倉末期に成立す）など——は和歌、連歌を作る上から起つたてにをはを研究であるが、これもその当時の言語が次第に變つて行つて和歌に詠むやうな平安中期の言語に基いた文語式のものとの間にくひ違ひができ、ことにてにをはにおいて意味や用法に相違が生じてこれを正しく用ゐることがむづかしくなつたために、それを王朝の古へに復すことを目的として起つて来たのであらう。しかし、てにをはは祕伝書にしても、——平安、鎌倉時代の和歌を証歌に採つてはゐるが、——作者が兼好と同一時代の、しかも同一社会の歌人、連歌師であつてみれば、自らこれらの人にも中古語理解の限界があり、その上でなされたてにをはを研究であつたのである。

つまり、徒然草とてにをはは祕伝書とは同位相に置かれるものであり、作者もまた同位相の人であるから、これら中世人は中古語

に對して同様の意識を持つてゐたに違ひない。かかる見地から、私は徒然草の破格の用法を祕伝書のてにを説をもつて解きほぐし、中世人は中古語をどのやうにみたか、いひかへれば、中世人はどのやうに中古語を意識したか、また、どの程度中古語を理解したか、を論究したのである。もし、それが論究できるならば、時枝誠記博士が日本文法文語篇に述べられたところの、

中世以後の文語は、中古の伝統を継承してゐると云つても、それは決して、中古の法則をそのまま継承してゐるのではなく、独自の變遷を経過して來てゐると考へられるのである。中世以後の文語がどのやうに變遷して來たか、またそれはどのやうな性格の言語であつたかといふやうな問題は、恐らく今後に残された重要な課題であらう。(第一章總論三文語法の研究)といふ重要な課題に應へることになり、さらに、

中世以後の文語研究は、空白のままに放任されたのであつた。(同書同頁)

と述べられた、その空白の一部分を埋めることになるかと思ふのである。

いま、口頭語を除いたすべての文章語を広義の文語と解すれば徒然草には、つぎの三つの狭義の文語が交つてゐると考へられ

つとに、本居宣長が、あしわけをぶねに、

兼好が文は、古へにもをとらぬほどの所あり、これ全く自然にあらず、古の雅言をならひて巧なるもの也(増補本居宣長全集)第十(一七一頁)

と評してゐるごとく、徒然草は雅語的要素を持つ文語、換言すれば、雅語的な平安中期のままをおそつた言語をもつて書かれてゐるが、やはりすべてはおそふことができなかったとみえて、すくなくならず破格のてにををみることができ

それは、たとへば、

常に聞きたきは琵琶、和琴。(第一六段)

家に取りたき木は、松、桜。(第一三九段)

といふやうな中古語ならば「聞かまほしきは」「あらまほしき木」とあるべきところに「たし」がみえて來るなど。この「たし」といふ希望の助動詞は中世初期にあらはれたのであつて、これは口語的要素ではあるがまた文語でもある。徒然草にはこのやうな口語的要素を持つ文語も交つてゐる。

いま一つは、上述の雅語的要素を持つ文語でも、口語的要素を持つ文語でも、いづれでもないもの、すなはち、中世の文語——中世を特徴づける文語の中の文語ともいふべきものが徒然草にみえる。

さすれば、徒然草は雅語的要素を持つ文語、口語的要素を持つ文語、さらには、そのいづれでもない文語、すなはち、当時の口語とも相違がある、しかし雅語そのままではない、いはゆる中世の文語をも交へて書かれてゐるといふことにならう。

この雅語的要素を持つてもなく、口語的要素を持つてもない、文語も、やはり文語として生きた当時の文語であると思ふが、私は徒然草の中で、この中世の文語をてにをを祕伝書を使つて拾ひあげてみようと思ふのである。

二

私は、いま、徒然草の格を外した用法「ましかば……む」「け」と「つつ」などをあげて考察しようと思ふのであるが、その場合の用例は、鳥丸光広校訂の古活字本を底本として正徹自筆本をもって校訂した橋純一先生の昭和校註徒然草（武蔵野書院刊）によることにする。

(一) ましかば……む

まづ、徒然草を読んで来ると推量の助動詞「まし」のつぎのやうな用法が目につく。

(イ) 此の僧都、或法師を見て、しろうるりといふ名をつけたりけり。「とは何物ぞ」と、人の問ひければ、「さる物を我れも知らず。若しあらましかば、此の僧の顔に似てん」とぞいひける。(第六〇段)

(ロ) あからさまに、聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。率爾にして、多年の非を改むる事もあり。かりに、いま此の文をひろげざらましかば、此の事を知らんや。是れ即ち触るる所の益なり。(第一五七段)

そこで中古における「まし」の用法をかへりみると、二つの場合が考へられる。

一つは現実の状態に反対なことを仮定して、その下で推量する場合で、これは、

夜一夜風吹き荒るるに、「げに、かうおはせざらましかば、いかに心細からまし。同じくは、よろしき程におはしまさましかば」と、ささめきあへり。(源氏物語 若紫)

といふやうにもつばら「ましかば……まし」〔万葉集などは「ませば……まし」と呼応した形であらはれることが多い。二つには「む」に近い意味に用ゐられる場合で、物やいひ寄らまし、とおぼせど、うちつけにやおぼさむと、心恥かしくてやすらひ給ふ。(同 末摘花)

といふやうに、これは疑問語か疑問の係り助詞といつしよにあるのが普通である。しかし、この前二者の「まし」の用法は中古においてはほぼ同じくらゐの比率であらはれてゐる。

してみると、徒然草の「ましかば……む」の用法は前者に属するものと考へ得るから、中古のてにをはの用法をもつてすれば、当然、(イ)、(ロ)の例は、

(イ) 若しあらましかば、此の僧の顔に似たらまし。
(ロ) かりに、いま此の文をひろげざらましかば、此の事を知らざらまし。

となければならないのに、それが徒然草には「ましかば……む」とあるのはあきらかに中古の格を外した用法である。

さて、そこで「まし」といふ語について、てにをは秘伝書の所説を窺ふと、姉小路式の第一巻に、

ましといふてにをは らんのかゝへなるべし(国語学大系手 爾波一六五頁)
と説いてをり、さらに春樹顯秘抄(著者不詳、室町末 期頃成立する)の第一はねてにをはの事の条には、

ましといふてにをは らむのかゝへと同じかるべし(国語学大系手爾波 一八九頁)
と説明してゐる。

これら秘伝書によれば、「まし」は「らむ」のかかへと同じで

あらうといふのであるが、それでは一体、この「かかへ」といふのは何であらうか。この「かかへ」をもつとも詳しく説明してゐるのは春樹頭祕増抄（著者有賀長伯）であつて、その凡例のところに、

かゝへのかな、をさへのかな、といふことあり。かゝへは上にあり。をさへは下にあり。たとへばらんとをさへむとては上にや。かゝいゝかに などうたがひの文字にてかゝゆるをいふ。（国語学大系手続 波二〇頁）

と述べてゐるごとく「かかへ」とは呼応した形の呼の方、すなはち、係りことばをさすのである。

かく、てにをは祕伝書は、ある事柄を見開きしてそのかげにある原因・理由、あるひはその行なはれる範圍などを推量する「らむ」を疑ひのてにをはと考へたのであるが、「まし」もこの「らむ」と同じにみて疑ひのてにをはと考へ、「まし」を用ゐるにはかかへが必要であると考へたのである。

このやうに「まし」といふ語を考へたといふことは、おそらく祕伝書の作者が中古における「まし」の二つの用法を把握することができず、一方の疑問語や疑問の係りことばと共にある場合には「む」とかはらない意味に用ゐられるといつた「まし」の用法をもつてすべての「まし」の用法と解し、そこから歸納した結論ではなかつたらうか。

事実、「まし」を「む」と同じ意に考へたのは、てにをは祕伝書だけでなく、江戸時代のてにをは研究書も同じであつたのである。たとへば、その初期になつた一步（編者不明）の中巻には、

いはまし きかましは いはん きかんと云ふ心也 又い
はふ きかふと心得てもおなじ事也。（国語学大系仮名 通一〇七頁）

といふやうに「まし」を説いてをり、その後の氏瀧平波義慎鈔（宝曆十年なる）にもてには網引綱（昭和七年なる）にも「まし」の真義をつかみ得ないまま、宣長なる、詞玉緒六の巻に、

おほよそましは。んを延たはる如く聞えて。大かたんといふと同じ意なり。（増補本居宣長全集 第九 二二二頁）

と説いてゐるのであつて、江戸時代の学者に至るまで、「まし」は「む」とほぼ同意であると意識されてゐたのである。

つぎに「まし」といふ語の変遷について論を進める。一体、徒然草にあらはれるやうな「ましかば……む」の用法はいつごろから出て来るか。

中古の初期、落窪物語に、つぎのやうな例がみえる。

我が身の幸あらましかば、かくうち続きてありき給はまし。も
こよなき程ならで、いかによからましと思ふに、（三の巻）

これは八講の催しのところで、三の君がもとの夫の中納言の美しい姿をみて縁の切れる以前のことを思ひ出すところである。この「我が身の幸あらましかば」は「いかによからまし」と呼応してあきらかに反実仮定であるが、「かくうち続きてありき給はまし」の「まし」はその上に「かく」とあるから「かく……む」と考へられ、「む」とあつてもよきさうなところである。

つぎに、源氏物語には「ましかば……む」と呼応した形はみえないのであるが、吉沢義則博士の対校源氏物語新釈でみるとただ一つ、つぎのやうな例がある。

罪いと深かなるわざと思せば、かるむべき事をぞすべき、七日々々に経仏供養すべきよしなどこまかに宣ひて、いと暗うなりぬるに歸り給ふも、あらましかば、今宵歸らむやは、と

のみなむ。(蜻蛉)

これは薰君が律師に浮舟の法事のことを指図した後、浮舟を思ひ出すところであるが、このあらましかば、今宵帰らむやは源氏物語大成でみると「む」とある本文はなく、すべて「まし」とあるから湖月抄本の誤りかと思はれる。したがつて、源氏物語には「ましかば……む」の例はないといふことになるが、この「帰らましかば」の「まし」は「む」とかはらない。「まし」の意味にとれさうである。

しかして、中古文にはつきり「ましかば……む」があらはれて来る最初は今昔物語集であらう。今昔物語集には、

此ノ金子無カラマシカバ汝ヲ殺サント思シヤハ。(卷四第三四)

若狭ノ国ヘ不レ行ザラマシカバ此ノ人ヲ見付ケンヤハト返々ス喜テ。(卷一六第七)

といふやうな「ましかば……む」の例が散見する。さらに中世に入ると石清水物語などに、

世はかく思ひの外にも有りけるかな、立ち入らざらましかばかか事を見付けてむや。(上)

といふやうな例がみえて来るのである。

ところで、ここで注意すべきは、富士谷成章があゆひ抄の巻四、六倫第三、将倫三に「何ませば」「何ましかば」を、

凡上に「ませば」「ましかば」などいへば、下にかならず「まし」「ましを」「ましものを」「ましかば」「ましかばは」など

どうかするは常なり、又「まし」ならずして「可倫」をもてうけたるもあり「ぬべしやは」「よく有ける物」などの類見

本抄「ましかば」はねがひの心によみつめたるは「まし」「可」などもうけざるも多し。(国語学大系手続 波二七三頁)

といふやうに説いてゐることである。この記述によれば、成章は「ましかば……まし」「または「ませば……まし」と呼応する形の外に「ましかば……べし」「または「ませば……べし」と呼応する形があるといふのであるが、この「ましかば……べし」「ましかば……む」と同じやうに考へてよいと思ふのである。

いまこの例をあげれば、万葉集に、

可久婆可里 古非牟等可彌豆 之良末世婆 伊毛乎婆美受會
安流倍久安里家留(卷一五、三七三九)

といふやうな例がみられ、古中に入つて、字律保物語に、

なほ賢き君なり。御門となり給ひ、国知り給はましかば、天の下ゆたかになりぬべき君なり。(藤原の君)

また、源氏物語にも、

さてかの空蟬のあさましうつれなきを、この世の人にはたがひておぼすに、おいらかならましかば、心苦しきあやまちにてもやみぬべきを、いとねたく負けてやみなむを、心にかからぬ折なし。(夕顔)

昔よりおほげなき心の侍りしを、ひたぶるにこめてやみ侍りなましかば、心のうちにくたして過ぎぬべかりけるを、なかなか漏らし聞えさせて、(若菜下)

といふやうな例が散見する。さらに中世に入つて、たとへば平家物語(平家物語の語法)にも、

彼企遂マシカハ其御辺トテモヲタシクテヤ御ワスヘキ

(一末、三十四、オ)

上古ナラマシカハナシカハ失ヘキ（六本、五十、オ）

といふやうな例がある。

このやうに「ましかば……む」、さらには「ましかば……べし」と呼応する形のあることから推して、宣長も玉あられの歌の部に

ましかば、ん又べきべしといふと大かた同じ意にて、（増補本居宣長全集第九

四頁）

といふやうに「まし」といふ語を単なる推量や意志の意味に解したのであらうが、上述の諸例をみてもわかるごとく「ましかば……む」にしても「ましかば……べし」にしても、上の「ましかば……む」は反実仮定である。もちろん、これは中古の正しい格ではないが中古文にも上にあげた落窪物語、源氏物語蜻蛉の例のごとき「ましかば……まし」と呼応した形であつても、きはめてまれには下の「まし」が推量の意味にみられる例もあるわけであるから「まし」にかかると傾向はあつたわけである。

上述のごとく、私は「まし」といふ語の変遷を辿り、「まし」の性格を考察したのであるが、ふたたび徒然草の「ましかば……む」の用法を検討することにする。

まづ、問題は仮定の条件をとる「ましかば」にあるのであるが、いま、徒然草の(イ)、(ロ)の例の「ましかば」を見ると、これらの「ましかば」は仮定であつても反実仮定といふやうでなくなつてゐるやうである。

(イ)の例の「若しあらましかば、此の僧の顔に似てん」の仮定の条件をとる「ましかば」は「もしあるなら」といふのである。これは上に現実にはしろうりといふやうなものがないといつてゐるのではなく「我れも知らず」といつてゐるのであるから、「若

しあらば」と同じに解せられるのであつて、さすれば反実仮定とはいへないやうである。

(ロ)の例の「かりにいま此の文をひろげざらましかば、此の事を知らんや」の「ましかば」の方は、一見反実仮定のやうでもあつた。すなはち、(イ)の方は一回の仮定であるに対して、これは「聖教の一句を見れば」いつも……であるから、一回の事実に対する一回の仮定でない。それゆゑ反実仮定といへさうである。がしかし、それでも中古における「ましかば」の用ゐ方とは多少ずれて來てゐるやうに思はれる。

してみると、兼好の用ゐた「まし」は中古に用ゐられた「まし」とはもはや異つたものであつたと考へられるのである。

かく、「まし」といふ語について、徒然草とてにをば祕伝書をみて來たのであるが、要するに、これは、中世人の「まし」に対する意識がもはや「まし」の原義を忘れたものであり、かつ、中世人は「まし」の二つの用法をつかむことができなくて、ただ「む」と同じに理解して、その区別がつかなくなつてゐたのであらうと思はれる。

ゆゑに、よし、それが「まし」といふ語の原義を忘れ「む」に近い意味に用ゐたにしても、兼好の時代に文語として生きた語であつたとすれば、「ましかば……む」の用法もあながち兼好の無知から生じた破格の語法とはいへないと思ふし、さりとて、兼好が技巧上「ましかば……む」と格を外すことによつて効果をねらつたとも思はれない。早見をもつてすれば、やはりこれが中世の文語であり、中世を特徴づける文語の中の文語であると考へたいのである。

(一) ける

また、徒然草には、回想の助動詞「けり」の連体形が格助詞「と」に続いた「けると」といふ形が頻用せられてゐる。

(二) 「驚のゐたらんは、何かは苦しかるべき。此の殿の御心さばかりにこそ」とて、その後は參らざりけると聞き侍るに、

(第一〇段)

(三) 新院のおりるさせ給ひての春、詠ませ給ひけるとかや。

(第二七段)

(四) たびたび強盜にあひたるゆゑに、この名をつきにけるとぞ。

(第四六段)

(五) 別当入道さる人にて、「此の程百日の鯉をきり侍るを、今日欠

き侍るべきにあらず、まげて申し請けん」とて切られける、

いみじくつきづきしく、興ありて人ども思へりけると、ある

人、北山の太政入道殿に、語り申されたりければ、

(第二三一段)

これは回想の助動詞「けり」が格助詞「と」に続く場合には、中古の正しい格からいへば、「けりと」終止形から続かなければならないのであるが、徒然草では「けり」から「と」に続く場合には多く連体形から続いてゐるのである。これについて、注釈書はたぶんこの時代には一般にこの破格用法が行はれてゐたのであらうといつてゐるが果してさうであらうか。

このことについては、中世において連体形の終止形吸収の傾向があつたことと考へあはさなければならぬのであるが、てにをは秘伝書においては「けり」も「ける」も二つながらいひ切ることばであると説いてゐる。たとへば手爾葉大概抄をみると、

云切詞有^ト三定詞。計里計留^{ケリケル}、如^レ此類所^{ナリ}普知^ル人其數繁多也。
(國語学大系手)
(網波一四一頁)

とあり、さらには手爾葉大概抄之抄(鎌倉末期に成立する。)には、いひ切ることばについて、

如此の類とは、哉 けり ける らん ぬらし ならし ぞ
も けん てん けらし すらし し 何れも ぬ 畢んぬ

つしつくらしつ とや とは 物を 物かは めり なり
し だてつ

いづち いづこ など いかで 下知の詞。(國語学大系手)
(網波一四六頁)
と注記してゐるのである。

このやうにてにをは秘伝書には終止形「けり」、連体形「ける」共にいひ切ることばとしてゐるのであるから、当時「ける」でいひ切つてよかつたのであり、またついでにいへば、回想の助動詞「き」も終止形でなく、

「昨日は西園寺に参りたりし、今日は院へ参るべし、ただ今はそこそこに」などいひあへり。(第五〇段)

と徒然草にもみえるやうに連体形「し」でいひ切るやうに考へられてゐたのであらう。

翻つて中古をみる。中古文においては回想の助動詞「けり」を「と」でうける場合に、終止形の「けり」を「と」でうけるのは地の文に多く、連体形の「ける」を「と」でうけるのは会話に多いのであるが、地の文でもつて連体形「ける」でうけるのは多く出て来ない。しかるに、徒然草ではみな連体形をうけてゐるのである。

これは要するに、中世人が「ける」はいひ切ることばとして意

識し理解したのであつて、中古語に対しては、たしかに破格的用法であるが、やはり当時の正しい格であり、文語であつたのである。

(四) つつ

同様のことは「つつ」といふ接続助詞についてもいひ得るのであつて、徒然草には、つぎのやうな「つつ」の例がみえるのである。

(ハ)「わたり候ふ」といふ時に、各肝つぶるるやうに争ひ走り上

りて、落ちぬべきまで、簾はり出でておしあひつ。一事も見もらさじとまぼりて、(第一三七段)

(イ)年老い袈裟かけたる法師の、小童の肩を押しへて、聞えぬ事

ども言ひつ。つよるめきたる、いとかはゆし。(第一七五段)

「つつ」といふ語は動作の繰り返へされる意をあらはすのがもとで、転じて、二つの動作が同時に行なはれることをあらはすのにも用ゐられるのであるが、ここにあげた(ハ)、(イ)などの「つつ」は現代語訳をする。

(ハ)簾を押し出して押し合ひ押し合ひして、

(イ)わけもわからぬことをいろいろいひひして、

といふやうになつて、中古の用法である繰り返しの意と考へることとできるが、これは「押し合ひながら」「いひながら」などのごとく「ながら」と考へることができる。さすれば、兼好の時代の「つつ」はやや原義とは異つたものであることがわかる。

この見地にたつて、時枝博士が日本文法文語篇に、

「つゞ」を、中世のてにをを研究において、「ながらつゞ」と称して、「ながら」と同じに見て、二つの動作の同時的に、

行はれることを表はしたものとするのは、後世の用法からの帰納であつて、上代においては、動作の反覆と継続を云ひ表はしたものと解せられるのである。(第二章語論二) (辞二四一頁)

と述べてをられるが、この御見解は正しいと思ふ。

さらに進んでてにをを秘伝書をみる。秘伝書においては「つつ留めには秘授口決あり」として、とくに秘伝中の秘伝とされてゐるが、姉小路式の一異本、手爾尾葉抄(明珠庵釣月が姉小路式に頭)には、

ツ、留リノ事伝受也物ヲ二ツ云ナラベテヲサヘ字ニテ留ル也サテツ、ト云テニハナガラト云詞トマツ心得テ置ベシ(国語学八五頁)

と説いてゐる。これは明瞭に「つつ」を「ながら」と同様に考へてゐる。

ところで、手爾葉大概抄には、

簡留程経之心又非ニ二事相并之詠歌ニ不レ留也。中、筒茂其心等

矣。(国語学大系手爾葉一四一頁)

とあり、また春樹頭秘抄抄の第十七つつの事の条には、

調筒乍宛都拾充 ほどをふる心なり。ことに依

て文字かはるなり

田子の浦に打出てみれば白妙のふじの高根に雪はふりつゝ、思ひつゝぬればや人の見えつらん夢としりせば竟ざらましを

いづれも口伝を得べきなり(註歌道国語学大系手爾葉一〇九頁)

と説いてゐる。さらに春樹頭秘抄抄には、第十五つつ留の事の条

一、つゝとめには口伝あり。つゝには、程ふるつゝながらつゝとてあり。いひかなへがたき物なれば大かたの歌よみは心づかひすべきよし先達申給へり。仍用捨せしむる也。終句の外の四句にあるつゝはそのさに及ばず

新古今 田子のうらに打いでゝみれば白妙のふじのたかねに雪はふりつゝ

古今 思ひつゝぬればや人のみえつらんゆめとしりせば
 覚ざらましを

是等は程ふるつゝ也。つゞくつゝともいふ。

後撰 かきくらし雪はふりつゝしかすがに我家のそのに
 うぐひすぞ鳴

これはながらつゝ也(国語学大系手続 波一四一頁)

と説明してゐる。

これらてにをば秘伝書は「つつに程ふるつつ」と「ながらつつ」のあることを述べてゐるのであるが、秘伝書に「程ふるつつ」といふのは動作の繰り返される意をあらはす「つつ」と考へられ、「ながらつつ」といふのは二つの動作が同時に行なはれる意をあらはす「つつ」と考へられるのである。

されば、兼好も「つつ」を、

骸は気疎き山の中にをさめて、さるべき日ばかりまうでつつ
 見れば、ほどなく率都婆も苔むし、木の葉ふり埋みて、(第

三〇段)

己れも入りて、たてこめて、捕へつゝ殺しけるよそほひ、お

どろおどろしく聞えけるを、(第一六二段)

といふやうに動作の繰り返される意をあらはすのに用ゐてゐるが

ら、(b)、(c)のやうにも用ゐてゐる。

要するに、「つつ」の二つの動作が同時に行なはれることをあらはす用法は中世に多くなり、秘伝書において上述のごとく理解してゐたのであつてみれば、やはり中世人が「つつ」をいはゆる「ながらつつ」にも用ゐるのは当然であり、これも中世における文語であつたと思ふのである。

結

以上、私は、語史の面からは徒然草を、語学史の面からはてにをば秘伝書をもつて、徒然草の格を外したてにをばの用法と秘伝書にてにをば説との交渉を論じたのであるが、そこに浮びあがつた「ましかば……む」「けると」「つつ」などのてにをばの用法を、雅語的な平安中期のままをおそつたものでもなければ、あるひはまた口語でもない、いづれでもないものであつて、これがすなはち、中世の文語であり、文語として生きた当時の言語であると結論したのである。

なほ、私のこのやうな徒然草とてにをば秘伝書とを対比する研究態度について、亀井孝先生は、

徒然草は散文の系列に属するものであり、てにをば秘伝書は和歌作成の規範を記述したものであるから、これは和歌言語の系列に属するものであるが、このやうに散文言語の系列の徒然草と和歌言語の系列のてにをば秘伝書とを、果して同一に論ずることができるかどうか。(東大で開かれた国語学 会 金研究発表会の席上で)

といふ質問を提せられた。これに対して卑見を述べれば、たしかに亀井先生のいはれるやうに、和歌言語の系列と散文言語の系列

とは一応別のものであり、言語資料の扱ひ方として、その別に基く考慮は十分に必要であると思ふ。しかしながら、それはそれとして、またさうであるとしても、その一応別な二系列に、私が見て来たごとく、かくも同一のてにをはの用法があらはれるといふこの事實は動かしがたいものであり、和歌と散文とを一応別としてみるといふ資料の扱ひ方そのものに、少くともこの場合、なほ反省考慮の余地があると考へるのである。

最後に、本稿はまつたく未完成のものであり、大方の諱憚なき御叱正をこひねがふものである。

〔附記〕本稿は昭和二十九年十月東京大学における国語学会研究発表会で発表した原稿に手を入れたものである。本稿を草するにあつて、語学史の面で御教導下さつた時枝誠記博士、池上禎造先生、中田祝夫先生、また語史の面で御指導下さつた佐伯梅友博士、阪倉篤義先生、森重秀卓先生、そして徒然草を読むことをおすすめた成田奎之助先生に、記して感謝の意を表する。

（昭和二十九年十一月十五日稿）

——京都大学大学院学生——